

納和歌集等於平等院經藏記

上野理

拾遺集から後拾遺集にいたる八〇年間におよび勅撰和歌集空白期の問題を、関白頼通の和歌集集成の事業に關連させて論じることにした。

「納和歌集等於平等院經藏記」は、大學頭惟宗孝言によって延久三年（一〇七一）九月に記されたもので、朝野群載・本朝統文粹・本朝文集に収められているが、竜門文庫所藏『平安末期書寫平等院經藏目錄』のものが、善本といえよう。その訓点を參考にしてよむと次のごとくである。

和歌集等を平等院の經藏に納むる記

和歌は八万十二の教文に關せず、姫且孔父の典籍に載することなし。唯、日域の風俗として、空しく艶流の綺語を抽たすのみ。然れども猶、男女芳語の間、芝蘭契りを結ぶの処、初めに配偶の志を遂げんがために、屢々慇懃の懷ひを述ぶ。後に昵愛の交りを変ずるにより、更に參商の恨を遺す。徒らに虚誕花飾の言葉を飛ばし、互に輪廻生死の罪根を載す。

その思風を謂はば、最も發露に足れり。又、壯年の昔、朝務の余に、多く數家の篇什を閲して、自づから六義の心情を勸かす。万葉集より始め、拾遺抄に至る。その吟詠の人を見て、かの比興の趣を知る。百年の往賢を隔て、他界の前輩を起こすといへども、若しこの一言に感せば、豈、三業を慙ちざらんや。しかのみならず、時に外慮を断ち、側かに内典を聞くに、龜言契語、遂に中道の風に歸し、妄想戲論、皆、実相の月に混ぜんと。故にこの和歌集等を以て平等院經藏に納む。曾て顯密法文の細映に加へんにあらず、偏に讀喚仏乘の句偈に慣はさんがためなり。願はくは、數篇の風雲草木の興、恋慕怨曠の詞を以て、誦して安養世界七菩提の文、八正道の詠と為さん。これを以て集の中に載せたる所の貴賤道俗、吾が願念に牽かれて、併せて一仏土に生ぜむ。宿往通に誇り、串習力に依り、春の花を忘ることなく、七宝莊嚴の行樹を觀び、猶、秋の月を思ひて、四智円明の尊客を讀せん。今、衰老に臨み、この淨心を發す。適々、我を知るの者あらば、遍く成仏の縁を結ばん。時に延久三年暮秋九月記す。

作者 大学頭孝言

右はほぼ、和歌は仏教や儒教の典籍にもない日本個有のものであり、そのうえ恋愛のなかだちとなる虚誕花飾の罪深いものである。かつて、諸家集や撰集を閲読し、和歌が詩のごとく六義をそなえ、比興の趣を有していることを知った。これは第二義的なものであるので、歌人たちは死後とはいえ、菩提のさまたげとなることを恥じていよう。しかし、仏典は狂言綺語も讃仏来の因となり、転法輪の縁となると教えている。これらの和歌集等を平等院の経蔵におさめ、七菩提や八正道の詠とし、また、集中の各階層の歌人たちも、わが願念にひかれて極楽往生をとげることを願うことにしたい。衰老の年になってこの淨心を持つにいたったが、仏はそれを知り成仏の縁を結んでくれよう。というのであろう。

作者は惟宗孝言であるが、願主の記載はない。統本朝通鑑は「前関白藤頼通、万葉集・古今和歌集・後撰集・拾遺集を平等院経蔵に納め、大学頭孝言をしてその事を記せしむ」といっている。おそらくこの「納記」を資料にしての記載であらう。孝言は願主とする説もないではないが、やはり福山敏男氏がのべているように「虚心に読めば一人の長者がその感懷をのべたものと採れる。家格も高くない儒家の惟宗家の出で当時従五位下あたりの位しかもたなかった孝言が、時めく宇治の大殿の御倉に自身で歌集を奉納するような事情は考え難いことである。（中略）八十才以上になっても国司をつとめる様な人物が、五十七才位で「衰老」の年とは云い難いかと思われる」（宇治平等院の経蔵と納和歌集記）『史述と美術』昭二六年一・一・二月）と考え統本朝通鑑の

願主頼通説にしたがうのが自然であらう。

「衰老」という表現は、実は、五七歳の孝言と八〇歳の頼通のいずれに適切かという問題にとどまるものではなかった。この言葉は白楽天が「香山寺白氏洛中集記」で、六九歳の自己を「衰老」と称したのを模倣したのであるが、納記にみえる狂言綺語の文学観をあらわした部分は、洛中集記の「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤をもて、転じては当来世々讃仏乗の因、転法輪の縁とせん」をそのまま継承していることは明瞭なことであり、頼通が平等院に歌集を奉納したのも、自居易が香山寺に洛中集を納めたのを模倣した、狂言綺語の文学観にもとづくものでないかということが思われてくるのである。なお白楽天の「願以今生世俗文字放言綺語之因」という類似した句が同じく文集所収の「蘇州南禅院白氏文集記」にみえ、白氏文集を寺院に納めることは他に、「東林寺白氏文集記」、「聖善寺白氏文集記」にみえているが、この納記が直接影響を受けたのは、洛中集記である。

狂言綺語の文学観は白楽天の影響をうけて慶滋保胤らの勸学会にはじまり、左記の洛中集記の文章が和漢朗詠集にとられるなどと流行していった。栄花物語「疑」の道長出家を伝える寛仁三年（一〇一九）の条には、僧俗が経文を句題和歌を作るように釈教歌に詠み、白楽天の「願はくは今生世俗文字の業」の句を誦したということがみえている。釈教歌はそれ以前からすでに製作されており、寛弘九年（一〇一一）に選子内親王の発心和歌集も成立していたが、和歌を狂言綺語とし、かえってそれを第一義に帰そうという和歌と狂言綺語の文学観との結合は、道長出家後の歌会な

どを考えてよいであらう。

和歌を狂言綺語とする考え方がはっきりあらわれたのは、この納記が早い例となろうが、納記は和歌が恋愛の場で虚誕をいう花飾の言葉として罪根とみなし、また、和歌が詩のごとく、第二義的な文学や風流の分野に心を誘うことを罪とするのであらう。前者は現実の生活を罪とする仏教思想にもとづくものであり、狭衣物語で大将が女二宮のもとにしのびこんで、「いと罪得がましきことの様かな」と後悔し、「当来世々転法輪の縁とせん」と誦するのように、好色を罪とし、その契機となる和歌を罪根とする考えであるが、後者の場合は、和歌に執することを罪とする考え方である。日常生活の中に溶解した歌のほかに、和歌独自の目的を持ち、また独特な世界を形成し、執するに価値ある和歌が和歌史の中心をしめ、それへの執着が第一義の信仰と矛盾することを、わずかに感じはじめた結果であらう。また、白楽天が香山寺に納めたのは、自分の文集であり、自己の後世を願うものであったのに対し、納記の場合は、種々の和歌集であり、自己の歌集ではなく、しかも、自分のためばかりではなく、撰集所載歌人の追薦をも意図したものであったのである。狭衣大将のちに飛鳥井女君の絵日記をみて、供養のために経紙に漉きかえ、経文を書写し、女君ゆかりの常磐の家を寺にしそこに納めたように書かれているのも、ともに白楽天の場合を発展させたものと考えることができようと思う。

延久三年八〇歳の晩年の頼通は、和歌を狂言綺語と観じ、歌人の追薦を意図して平等院に歌集を納めたのである。

以上は、納記の願主を頼通として論を進めてきたが、他の場合も想定すべきであらう。しかし、歌集が平等院の経蔵に奉納されていることを思うと、かりに孝言が願主であったにしても、また第三者が願主である場合を考えてみても、頼通の意向を無視するはずはなく、それにそったものであり、如上の頼通の和歌観が大きく相連する場合を考える必要はなさそうである。また、納記の和歌観は、頼通のそれではなく、作者孝言のものであるかもしれないという意見も出ようが、作者の思想が濃厚に入りこんでいることは当然のこととして認めても、摂家と縁の深い彼の場合、とくに、その思想は願主と共通するものであり、頼通の意向を十分に反映した記述をしていると考えて誤ることはないと思う。

細かな考証を省略し、惟宗孝言の官歴を左に記す。孝言の事蹟を調査する際に、辻彦三郎、大曾根章介両氏より種々の教示をえたが、福山敬男氏の指摘の論文にも孝言伝の詳細な論述がある。生年は福山氏の指摘するように、本朝無題詩中の「閏三月尽日即事」と題する詩に「華席今為八十翁」とあり、嘉保元年（一〇九四）閏三月に八〇歳前後であったこととなり、長和四年（一〇一五）前後のこととなるのである。

長元七年（一〇三四）「二〇歳」勧学院での詩作にその名を見る（中右記裏書）

長久三年（一〇四二）「二八歳」九月九日 文章生として勅試を受ける（扶桑略記）

天喜四年（一〇五六）「三二歳」散位としてその名を見せる

(中右記裏書)

延久三年(一〇七一)〔五七歳〕九月 大學頭であつた(納

記)

承保二年(一〇七五)〔六一歳〕関白の侍統となる(二中暦)

承暦三年(一〇七九)〔六五歳〕九月二七日 前長門守と見

える(中右記裏書)

永保三年(一〇八三)〔六九歳〕九月 散位と見える(中右

記裏書)

寛治元年(一〇八六)〔七二歳〕十一月一日 備中大掾從

五位上の彼は掃部頭を兼ねた(本朝世紀)

同月一八日 正五位下に叙した(本朝世紀)

同年二月七日 御書所開闢となる(朝野群載)

同二年二月二日 摂関家司掃部頭孝言朝臣と見える

(為房卿記)

同六年六月九日 伊勢守と見える(師通記)

嘉保元年(一〇九四)〔七九歳〕三月九日 関白の家司とな

り、侍統となる(摂関詔宣下類聚・二中暦)

同年七月二三日 伊賀守に任ぜられる(中右記)

承徳元年(一〇九七)〔八二歳〕一月三〇日 伊賀守を辞退

する(中右記)

伊賀守を辞したのちの事蹟は不明であるが、その後まもなく没したものであらう。摂家と内裏、摂家と院とに政權が二分し、はげしく対立していた時代に、孝言がつねに摂政・関白に密接する立場を保持しつづけたことが理解できようと思う。

2

本稿はさきにのべたように、拾遺集以後拾遺集にいたる八〇年間のながきにおよぶ、勅撰集の空白の原因を説明することを意図している。

いうまでもないが、この寛弘から応徳への八〇年間は、けして文運の衰えた時代ではない。源氏物語以後の多数の後期の物語がつくられ、詩文の隆盛は明衡の作品や編著をみても理解できよう。平安朝を通じてもっとも多くの作品が作られた時代ともいえる。『平安朝歌合大成』によれば歌合は一一〇度におよび、歌会も年次の明瞭なものを三六度指摘することができる。なぜ、勅撰集は編纂されなかったのであらうか。散文学の燦然たる光彩に和歌が掩われていたわけではない。物語が和歌をつつみ、叙事抒情渾融の形態として行われていた時代でもない。和歌はさかんに詠出され、赤染衛門・定頼・源實法眼・伊勢大輔・能因・頼宗・相模・出羽弁・経信母・下野・弁乳母・頼実・家経・経衡・為仲・範永らの家集が現在に伝えられている。多くは自撰である。自分の作品を後世に伝えようとするばかりでなく、多数の私撰集が編纂された。散佚したものも多いが、能因の玄々集・源實の樹下集・良遍の打聞・経衡の十卷抄・大江広経の上科抄があり、撰者不明のものに麗花集・山伏集があった。能因らの私撰集編纂の意図は後述するが、撰集の必要を感じるものも、その力量を有するものも存在したわけであり、他に例のない、ながい勅撰集の空白

期は、撰者の適性をそなたものがいなかったためだとする明解する意見は、賛成しがたいものである。

文学史の面から納得のいく原因はさがせないが、偶然とするに八〇年間は、あまりに長すぎる。やはり、勅撰集という性質を重視すべきなのであろう。ここに、撰閣政治と勅撰集との矛盾が思われてくるのである。古今後撰両集の撰上に、藤氏は協力をおしまなかつた。時平や伊尹の役割を重視する考えが研究者の間にもみえてゐる。和歌は古今集以前の時代から、すでに国風を代表するものと考えられ、聖天子によって保護育成された歴史が省みられていたが、撰閣政治との矛盾はさほど大きいものではなかつた。初期の撰閣政治が律令制との矛盾を後期ほど強く意識しなかつたことと思ひあわせるべきであらう。むしろ、詩文と比較すれば和歌はまだ私的なものであり、撰家独裁の地固めをしていた彼らには、政治との関連のいくらかうすい歌集の方が勅撰漢詩集より賛成しやすかつたのであらう。古今集と後撰集との性格の相違も、撰閣政治の律令制との矛盾の度合いにあわせて考えることが、あるいは可能かも知れない。

平安朝の和歌史は、私的で実用的で典型的な襲の歌から、公的で文芸性を重視する晴の歌への転換の諸相を、種々の面に呈しているが、こうした和歌史上の変化が、拾遺集の時代に明確に認識することができるといふのは、たとえば、晴の歌を注文をうけて製作する専門歌人ともいふべき特殊な歌人が姿を消し、上流貴族や女房がその職能を継承するのは、こうしたことに積極的であつた花山院や道長の歌壇史に与えた影響を無視しえないのである。

が、彼らの意図に大きな相違の存在したことはいうまでもない。花山院には反撰閣家的な、律令制の回復・王権復活の政治があり、その一環として内裏歌合を催し、拾遺集の勅撰を意図するのであつたが、道長は自己の権勢を誇示する手段にし、晴のものになりつゝあつた和歌を政治権力を莊嚴するアクセサリーとしたのである（『襲の歌から晴の歌に』『国文学研究』昭三九・三）。

この勅撰集の空白期にも、歌道に執着する能因法師や和歌六人党の歌人もおり、能因法師集や玄々集の序文は、和歌が盛んに詠まれ、勅撰集が編纂されにいたることをもつて聖代のあかしとする考え方をのべており、彼らの軌道を伝える説話とともに、敷島の道の形成過程を考えさせるものである。彼らの理想は、後三条・白河天皇の親政、ついで院政によって達成され、和歌は政治と結びついて後拾遺集となるのであるが、白河朝の歌壇の中樞をしめたものは、受領と侍臣であつた。この勅撰集空白期に活躍する六人党の東国受領歌人は彼らの先驅をなすものであるが（「和歌六人党の問題」『文芸と批評』昭四〇・一）学儒を主とする侍臣が殿上で行つた歌会歌合も、この期の歌壇史を考察するさいに無視することはできない。

永承四年（一〇四九）内裏歌合や永承六年殿上根合は、侍臣が歌人となり、方人となつたものであり、関白頼通が一座を俯瞰する態度で臨んだとしても、天皇の侍臣や意気こみは、序文にも知ることができ。内裏歌合の序文中、「群臣皆、沿世の音を誇る」といひ、「およそ震遊の佳趣を見るに、天徳の旧儀に同じきものなり」とのべており、内裏歌合を行う積極的な姿勢をしめしてい

る。これは、内裏歌合の序文にみられる常套的な表現ではあるが、この歌合以前にはその例をみない。またかりに常套的であったとしても、彼らが摂関政治の最盛期に、内裏歌合を披講しようと思つたものが、共通して見せる、延喜天曆等の聖代への憧憬とそれを庶幾する方法を和歌にもとめたということがらを重要視したいと思うのである。

関白頼通も多くは歌合歌合を主催し、あるいは後援したが、天皇や侍臣の歌合とは、おのずから目的をことにしていたと考えるべきであろう。晴のものになりつつあった和歌史の影響をうけて、和歌の盛んなのは良い政治が行われているためという考えを知らぬわけではなかった。長元八年（一〇三五）三十講後歌合の仮名序は「おこなひたまふに、世の中思ふさまにのどかなりければ、せぬわざなく」と、頼通の執政をたたえ、その結果として風流が盛んになったという論法をとり、またこの歌合で勝った左方は住吉神社での和歌の序文に、「和歌は我國の風俗なり。世治まればこの興起こり、時賢なればこの思ひ切なり。故に神明を感動せしめ、人倫を交和するにこれより近きはなし」と記しているのである。

長元八年四四歳の関白頼通は、受領や侍臣のように、政治と結合させた和歌編を一時的には有したごとくであるが、当然のことながらみずから否定する律令制の回復・古代王権の復活に結びつく文学運動を展開させるはずもなかった。その後の雅会には、単に風流を楽しむ長者の姿をみるにすぎず、晩年の頼通は和歌を狂言綺語と観するにいたるのである。

ついで頼通の歌集の蒐集について論じることとする。赤染衛門集巻末に

関白殿に集ども集めさせ給ふとて、ここにもあらむ、参らせよと仰せられたれば、みな忘れにけるを、ただおぼゆるかぎり、書き出でて参らす奥に

これならで思ふことのみ数なきを書き集めてぞ君に見せばやという歌があり、関白頼通が家集を歌人たちに求めたおりに、赤染衛門が自撰家集を編んだことが知られ、その時期は、集中に孫の大江匡房の誕生を寿ぐ歌がみえるところから、長久二年（一〇四一）以後のことであり、彼女の最晩年にあたるので、その後、間もない時期に家集は成立したと考えられている。異論のないところであろう。^(注)

頼通の長久ごろの私家集の蒐集が何を目的とし、またどれほどの規模のものであったか、一切は不明であるが、赤染衛門集にすこしおくれて成立したものに能因法師集がある。橋本不美男氏は桂宮本叢書の解題で自撰とし、内部徴証によって寛徳二年（一〇四五）（以後早々の間に、ある公式の意図をもって撰上したものと推定している。序文は難解なものであるが、歌道がおとろえている現状をなげき、作者の貴賤によらず、秀歌が採択される勅撰集の撰上をまちのぞむ心を「所思」として記していることは十分にうかがえるものである。寛徳二年以後の作品の収められていないことをあわせて、だれかの命を受けて自撰したものと考ええるべ

きであり、「所思」を訴えた相手とその命令を出した人物と考えることができよう。勅撰集を希望する旨の表明であるから、後朱雀天皇か時の権力者であるべきであり、推測を重ねることになるが、頼通と考えたいと思うのである。

家集を能因法師が提出したさを、頼通と考える根拠はとくになく、赤染衛門らの歌人に家集を求めたとすれば、それにつづいて歌人として次のクラスに属する能因法師らに家集を求めたのではないかということ、また彼が、後拾遺集の所載歌によると、頼通から近ごろどんな歌を作っているかなどと親しくたずねられ、歌をおくって様をもらうなど、その歌と才を愛されて知遇をえていたこと、他に特定な人物も考えられない等の理由から、たんに臆測するにすぎない。関白頼通に長閑政治とはふさわしくない勅撰集の撰上を訴えるのは適切でないようだが、すでにのべたように、長元八年（一〇三五）三十講後歌合のころには、彼にも下級貴族の「敷島の道」の源流ともいふべき和歌観に同情を示した一時期があったのである。納記の「壮年の昔、朝務の余に、多く数家の篇什を閲して、自づから六義の心情を動かす。万葉集より始め、拾遺抄に至る。その吟詠の人を見て、かの比興の趣を知る」という時期もこのころのことであろう。

頼通は壮年のころ、諸家集や諸撰集に覧し、時代は能因法師等の歌人たちに勅撰集を求めさせていたが、彼らの願望は実現を見ずに、勅撰集の空白期は延長したのである。能因法師は永承元年（一〇四六）の直後に、玄々集を編纂し、家集の序文でのべたように、序を附し、歌人の階級にかかわらず、すぐれた歌を採択

する編纂態度をとったが、この序文も家集序の「所思」と節を合わせるように、和歌を本朝の風俗とし、貫之ら勅撰集の撰者にならって一条天皇の永延（九八七）から後朱雀天皇の寛徳（一〇四四、二年に後冷泉天皇即位、三年四月永承に改元）にいたる秀歌を自己の評価によって集めたといひ、消没を心配してのことで歌道の中興を意図したことを叙しているのである。二つの序文を合わせることにより、勅撰集を希望して家集を献上したが、希望はかなえられず、みづから私撰集を撰んだという筋書をたどることが、できるがいが、であろうか。

関白頼通の限界を論じるまえに、晩年の歌集の集成事業を考えたおくことにしたい。これも推定によるものであるが、十卷本歌合巻の類聚と私家集の集成が彼によって行われたと考えられている。

十卷本歌合巻は内部徴証から頼通が計画し、天喜四年（一〇五六）四月から治暦四年（一〇六八）の一二年間に成立したことが歌合の研究者によって主張され、ほぼ定説化している。とくに久曾神昇氏は、完成を治暦四年四月にできるだけ近づけたいとし、総目録に「已上今上」の記載のないのは、歌合の編纂が成り、その目録を作成するころ後冷泉天皇が崩御したためと推測している（『歌合巻』）。

頼通が晩年に私家集を集成したというのは、橋本不美男氏の説である。橋本氏は、経衛集が編纂のうえで頼通関係の歌を重要視していることに注意し、赤染衛門集の場合を考慮して、頼通の集成事業に協力したものかと推測し、さらに、その時期を頼通の八

十賀の行われた延久三年と経衛集の成立したと考えられる延久四年の二年間と推定したのである（桂宮本叢書「経衛集」解題）。

赤染衛門集の成立した長久寛徳からは、ほぼ三〇年の歳月を経過しており、一連のものとするのは、頼通が三〇年間自分の八十賀を目標に私家集を蒐集しつづけたようで、いかがかと思われ、集成事業は二回に分離し、それぞれの目的を考えるべきであろう。

第二次は第一次と違い、その規模・目的はもとより、はたして行われたかどうかを論証する明徴するないが、経衛集のほかに藤原範永・橘為仲・四条宮下野等がほぼ同一の時期に家集を自撰している理由は、頼通の集成事業に協力したためと考えるのがもつとも理解しやすく、橋本説を卓見として承認すべきであろう。

歌合の類聚と私家集の集成の目的について考えるならば、久曾神氏は、道長によって完成された藤原氏の政治的努力下の文化を、頼通は壮年期にもつとも爛熟に達せしめ、晩年になつて彼は自己の生涯を記念する心から、数々の歌合をみずから編纂したと考えたのである。峯岸義秋氏もその説を全面的に支持しつつ、十卷本歌合巻の成立は、実に頼通にとってその輝かしい生涯の記念であり、平等院を造営した得意な時代にふと思いついたものと考えている。峯岸氏の説は、その意図をかつての栄花の回想にみるものとは相違し、また、聚類を発起した時期をかなり引き上げることになり、頼通の二度にわたる私家集の蒐集を一連のものとする考え方に有力な論理を与えることになると思うが、さきへのべたように本稿ではその立場はとらず、栄花の回想とする説を重視したいと思う。

第二次の私家集の蒐集は、頼通の八十賀の記念事業のようにも考えられるが、治暦末から延久にかけては、成尋阿闍梨母集にみられるごとく、後冷泉天皇の不例と崩御があり、頼通自身も重病の床にあった。おそらく、八十賀の延久三年をはじめから意図したのではなく、歌合の類聚と同一の目的をもってほぼ同時に完了すべきであったものが、遅延し、結果的に延久の三・四年ということになったのではないかと推察されるのである。

はじめの意図を推測するのはやめて、延久三年に書かれた納記との関係について考えることにしたい。

頼通が歌集を蒐集した場所は、彼のいる平等院であろう。狂言綺語の和歌編を持つにいたった彼は、それまでに所持していた多数の歌集とともに、新蒐集の歌集を経蔵に収めたはずである。孤本の万葉集もこの時に納められ、その時期は不明だが類聚歌林までがこの経蔵にあったというのである。この経蔵に狂言綺語の莫大な数の和文と歌集の納められたことが、想像されてくるのである。彼と深い因縁を有したと思われる万葉集や三代集の歌人の追善よりも、彼のサロンを賑わした栄花の形成者の後世を思うであろう。十卷本歌合巻と諸家集は平等院の経蔵に収められ、その編纂・集成の意図も、過去の栄花の回想のほかに、その率仕者とともに、一仏土に生まれることを願うという個人的な信仰心にもとづくものではなかつたかと推察されてくるのである。白居易はその文章を結ぶにさいし、「垂老の年筆をここに絶す。我を知る者あらばまた隠すことなかれ」とのべたが、納記は「今、衰老に臨み、この浄心を発す。適々、我を知る者あらば、遍く成仏の縁

を結ばん」というのである。納記の書かれた延久三年九月以降に、経衡らがその意にそって歌集を率納することも考えられてくるのである。

4

以上、頼通の二度にわたる歌集の蒐集についてのべた。推測に推測を重ねたので、考証といえぬ臆測にすぎない部分もあるようとは思ふが、さきにのべたように、本稿は、拾遺集から後拾遺集にいたる八〇年間のなげ勅撰集の空白期になったかを追求しているのである。頼通を中心に考えてみると、長元八年三十講後歌合の四四歳のころには、受領や侍臣の和歌観に共感をしめし、当時の歌人たちに勅撰集を切望する声を許していたが、納記によれば、和歌が詩のごとく六義をそなえた比興にすぎないことを知ったというように、和歌の風流に親しみ、本質を理解したにすぎず、歌人たちの期待に答えることはなかったのである。第二次の集成時、つまり延久三年の八〇歳には、和歌への倒倒のしかたは、まったく私的な懐古と信仰心を満足させるものでしかなく、勅撰集と結びつくものではなかったのである。

本稿の主題となった、勅撰集がこの期に編纂されなかった原因はすべて、勅撰集と摂関政治との背反性にもとづくものと結論づけてよからう。国史の場合を考えてみても、この間に撰定のけわいは何度か見せながら、国王の事蹟を讀める正史はついに成立せず、摂家の周辺で製作された栄花物語が、かつての栄花を回想し、摂関制の正当さを主張する同種の事実を指摘しうるのである。

う。この間勅撰集は受領層の侍臣たちが、復古と天皇中心の思想を宣伝しようとしたくらゐ後拾遺歌壇が形成されるまで撰定されることはなかったのである。勅撰和歌集は、文字通り「勅撰」の意を重視すべきであり、時の権力者がそれを必要としないかぎり、撰定されるはずのないものである。歌集そのものの成立の原因や撰者の問題を従来の文学史や和歌史にそって考える空しさを理解すべきであろう。

注 陽明文庫本や彰考館本後拾遺集の勅物には「赤染集ハ女子等所撰也、多入不可入之歌、如為基者非会合口、類而如集有其趣、宇治殿召集之時老耄、任女子撰之、女子尤無心、此事見江記」と見えている。孫の匡房の書いた江記から、祖母の赤染衛門集はおばたちの撰んだもので、大江為基とのことをはじめとしてあやしい点があるとうけとれるというのである。勅物は清輔のものと思われる。赤染衛門集の成立時は最晩年のおりであり、能因集の成立に近づけて考えるべきであろう。